

シルプール (Sirpur) における

僧院・尼僧院の発掘状況

(Shobha Rani Dash)

はじめに

Sirpur (旧名 Sirpur) はマディヤプラデーシュ (Madhyapradesh) 州より独立したチャットティスガル (Chattisgarh) 州のマハーサムンド (Mahasamund) 地区 (District) に属する小さな村である。州都ライプール (Raipur) より東方に約八五kmの距離に位置し、オリッサ州最大の河マハーナディー川の東岸に存在する。シルプールは四世紀ごろに南コーサラ国首都になった所であり、宗教的・政治的に様々な活動の中心地として栄えた都であった<sup>①</sup>。玄奘三蔵も六三九年にこの地を訪れている<sup>②</sup>。玄奘三蔵は当時のシルプールについて次のように述べている<sup>③</sup>。

自此西北山林中。行千八百余里至橋薩羅國 (中印度境)。橋薩羅國。周六千余里。山嶺周境林藪連接。国大都城周四十余里。土壤膏腴地利滋盛。邑里相望人戶殷實。其形偉其色黑。風俗剛猛人性勇烈。邪正兼信学藝高明。王刹帝利也。

崇敬佛法仁慈深遠。伽藍百余所。僧徒減万人。並皆習学大乘法教。天祠七十余所。異道雜居。城南不遠有故伽藍。傍有窣堵波。無憂王之所建也。昔者如來曾於此処。現大神通摧伏外道。後龍猛菩薩止此伽藍。時此國王號娑多婆訶 (唐言引正)。珍敬龍猛周衛門廬。

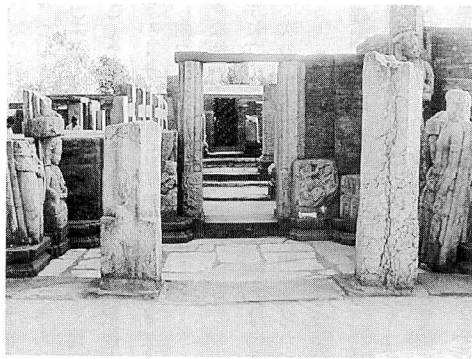
この中、「橋薩羅國」はコーサラ (Kosala) の音写であつて、そこに記されている位置はほぼ正確である。また「自此西北山林中」は、現在のオリッサ州を指している。玄奘の上記の記録を要約してみると、当時シルプールとその周辺には約一〇〇ヶ所の僧・尼僧院が存在し、そこには一万人弱の大乗仏教の僧侶と、異教徒たちが混在する七十余りの寺院があつたことが知られる。さらに、南の方には精舎があり、その横にアショーク王によつて建立されたというストウパーがあつた所である。そこは昔、釈尊が神通力を示された所であり、後に、竜樹菩薩が住まれた所でもある。

発掘がすすむ仏教遺跡について

このような豊かな歴史を持つシルプールであるのに、現在は殆ど知られていない状況にある。しかし、近年になつて、様々な遺跡の存在が知られ、ところどころ発掘がすすめられている。筆者は二〇〇六年二月にシルプールへ行つて現場調査を行った。約二五キロメートルの範囲に亘つてヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教の混在した遺跡がたくさん見られる。また約二〇〇余りの塚 (mound) があり、その内の約一〇ヶ所で発掘作業が行わ



第1図 シルプールの入口



第2図 Ānanda Prabhu Kuṭī Vihāra 遺跡



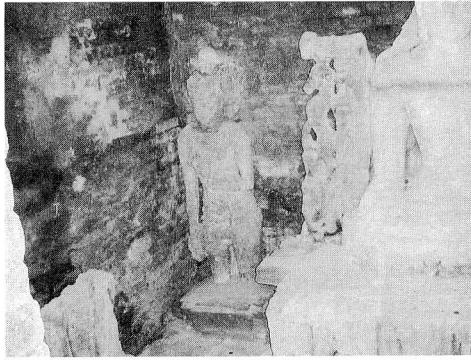
第3図 Ānanda Prabhu Kuṭī Vihāra 遺跡の触地印の石仏像

れている。現在発掘されている仏教遺跡の中で、五つの僧院と尼僧院と思われる遺跡が注目を集めている。この中、僧院と断定される、Ananda Prabhu Kuṭī Vihāra と Svastika Vihāra と名付けられた二つの遺跡は発掘が完了している。その他の三つの遺跡はまだ発掘中である。以下にこれらについて紹介してみよう。

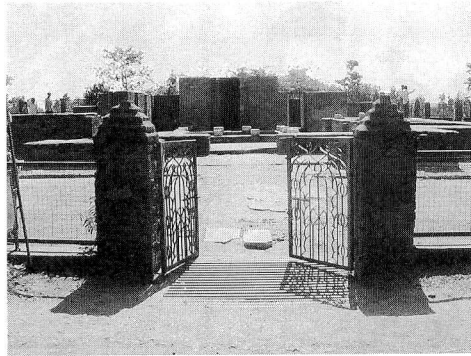
① Ananda Prabhu Kuṭī Vihāra 僧院跡<sup>④</sup>

仏跡は典型的な僧院の一つである。煉瓦造りのこの遺跡は一九五五年の発掘により存在が知られることとなった。発掘の

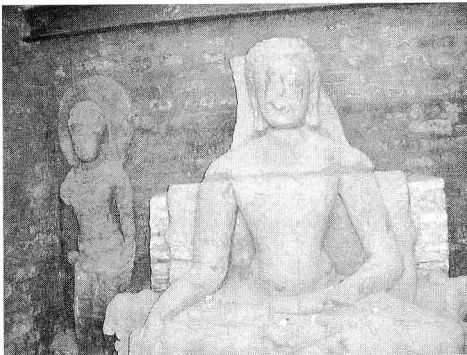
時に見つかった碑文によれば、この僧院は Mahāsivagupta Bāhaujan (595～655 A.D.) 王の時代に Ananda Prabhu という比丘によつて作られたものである。建物には一六本の石柱によつて造られた *sabha mandapa*、つまり集会所と名付けられている広い矩形の場所がある。それらの周りには一四の個室があり、各部屋は約  $8 \times 9$  坪の広さである。階段の跡があることからこの僧院が二階建てであったことが窺える。本堂と個室は通廊でつながっている。Garbhagrha (本尊が安置されている龕のような場所) には六・五メートルの高さの仏像が触地印 (*bhūmisparśa mudrā*) で鎮座している<sup>⑤</sup>。仏像の



第4図 Ānanda Prabhu Kuṭī Vihāra 遺跡の  
観音菩薩立像（左側の脇侍）



第5図 Svastika Vihāra 遺跡



第6図 Svastika Vihāra 遺跡の石仏（触地印）と  
脇侍・観音菩薩立像（左側）

右側には、右手に瓶、左手に蓮華を持つ蓮華手観音菩薩（Padmapāṇi Avalokiteśvara）の立像がある。これ以外に夜叉（Yakṣa）や守護神、女神像などもある。

② Svastika Vihāra 僧院跡<sup>⑦</sup>：北に面するこの煉瓦造りの、僧院と想定されている遺跡も、Mahāśivagupta Balaujan（595～655 A.D.）王の時代に仏教信者たちによって造られたとされている。この僧院は、*svastika* 状に造られているところから、そのように名付けられている。これの中心にも集会所（*sabha mandapa*）があり、その周りに個室が三室ずつ一列

に並んでいる。Garbhagṛha に八・五メートルの高さの仏像が触地印で鎮座している。その右側には脇侍の蓮華手観音菩薩（Padmapāṇi Avalokiteśvara）と思われる立像がある。

③ その他の遺跡：上記の二つの僧院跡は互に少し離れて別々に存在するが、残りの三つの遺跡は互いにわずか数メートルの間隔で存在する。発掘は完了せず名前もまだつけられていない。担当のシャルマ博士はこの三つの遺跡を五・六世紀のものであると述べている。⑧この内、左から一番目は比丘尼の僧院であると推測され、二番目と三番目は比丘の僧院と推測



第8図 デーヴァナーガリーと思われる文字



第7図 尼僧院跡と思われる遺

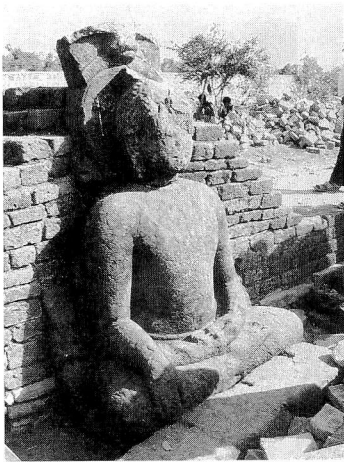


第9図 三重蓮華の石刻

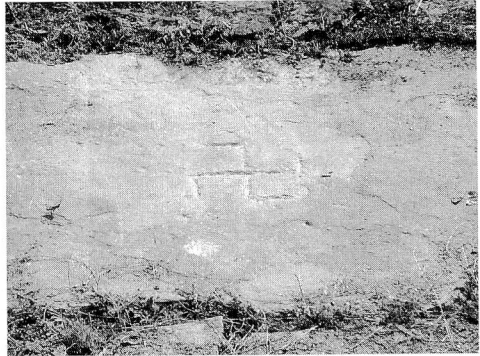
仏教徒に改宗させることと、ブツダガヤのマーホーデー寺院をヒンドゥー教徒から奪還するなどの運動などにより名が知られている。上記のナンデッシュワル氏は彼の在家信者であって、この発掘に全面的に協力している人物である。発掘現場は昔から稲作が行われていた、約一〇一八平方メートル (2.5acre) の土地であるが、氏の父が亡くなる際、この土地の一部を仏教のために寄付するよう遺言を残していたので、ある氏はナールジュナ師を連れてそこへ向かった。その場所を見たナールジュナ師は、「ここに仏教遺跡が眠っているので掘ってみよ」と予言した。そこで、マンサルにあるナールジュナ

されている。一番目からはバンゲルスの破片や金で作られた装飾品などが見つかっていると、そこから比丘尼の僧院跡と推測されている。

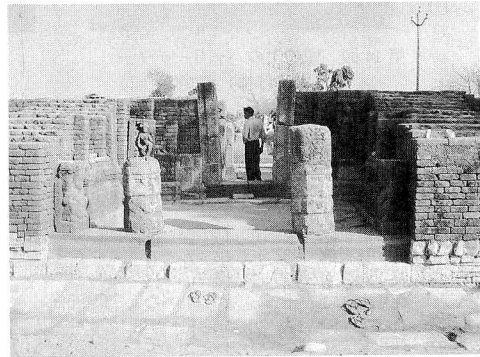
この三つの遺跡は Krishna Ji Nandeshwar 氏というシルプールの農園主の土地で発掘されたものである。彼によると、この発掘はバダグンテ・ナールジュナというインド国籍の僧（元日本国籍、本名・佐々井秀嶺）の予言と努力の結果であるとのことである。ナールジュナ師は、インドのダリット (Dalit) と言われるカースト階級の最下層の人たちを新



第11図 頭の上にナーガを戴く石仏  
(触地印) 座像



第10図 仏教で使われるまん字



第12図 二番目の遺跡

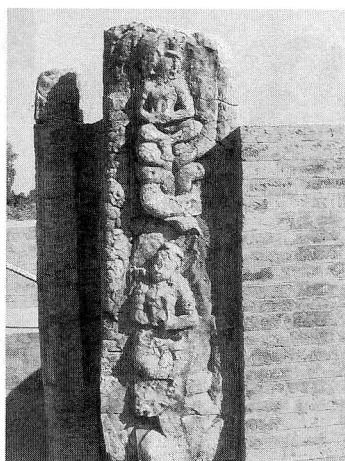
ができ、発掘状況や現地の仏教徒の人々の意見などについて、貴重な情報を得ることができた。

なかでも特に、他の遺跡と比べ、この三つの遺跡にいくつの特徴が見られることは注目に値する。その一つは、一番目の遺跡<sup>⑩</sup>の個室の床にあるいくつかの石の上に Devanāgarī 文字のようなものが彫られていることである。現地の人々はそれをそこに居住した比丘尼の名前を記した文字であると信じている。しかしそれは、インドに現在も残っている習慣の一つとして、寺院などの建設に自分の名前を記した石や煉瓦などを寄付することがよくあるので、恐らくこの尼僧院へ石を寄進した人物の

師の研究所 (Bodhisatva Nagarjun Smarak Sanstha va Anusandhan Kendra) の職員と、インド考古学局を退職したベテラン考古学者 A. K. Sharma 氏が発掘したところ、地下五メートルの地点から立派な尼僧院が発見されたのである。この発掘は一九九九年〜二〇〇三年の初期の段階はシャルマ博士の指導の下で行われていたが、最近になって漸くインド考古学局も不審者や自然破壊からこの遺跡を守るために、この土地の周りに煉瓦製の高い壁を作り、看板を立てるようになった。幸いにも筆者はこのたび土地の所有者ナデシュワル氏とコンタクトを取ること



第14図 頭蛇上のハーリーティー  
(鬼子母神)の立像



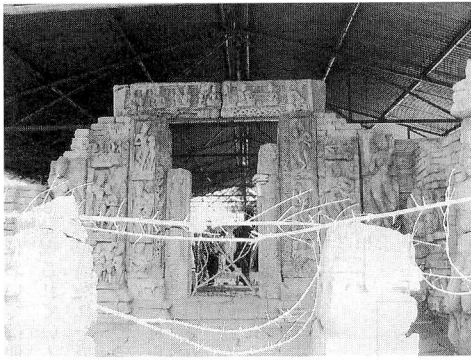
第13図 竜女礼拝像



第15図 蛇(ナーガ)の彫刻

回りになっているところから、仏教のまん字であることに間違いない。Garbhajha<sup>⑬</sup>と思われる場所には触地印形の巨大な石仏坐像が見られる。頭の上に巨大なナーガの頭の一部分が見られるところから、恐らくムチャリンドラ陀ではないかと推測される。頭部はこの仏像の首部分から二〜三メートル離れたところに落ちていたようであるが、発掘時にそれを見つけた現在の状態にしたようである。また、この遺跡の発掘の初期段階において、扉に施錠された跡や大きなひびの跡が発見されている。このことから、異教徒による攻撃あるいは伝染病等の重大な異変にたいする恐怖から居住していた信者たちが鍵をかけて逃げ、更に

名前を記した文字であろう。もう一つの可能性として種字であることも否定できないが、今の段階ではなんとも断定し難い。ともあれ、これはシルプールで今まで行われている発掘作業の中で、唯一の例であろう。この他にも、三重蓮華や仏教で使われるまん字(Svaraṅka<sup>⑭</sup>)やいくつかの神秘的な印も発掘されている。ヒンドゥー教のまん字は右回りであるが、このまん字は左



第16図 三番目遺跡の門



第17図 歓喜交會像のレリーフ



第18図 ナーガ夫婦と鳶の飾り

その後の地震で埋もれてしまったのではないかと推測されている。

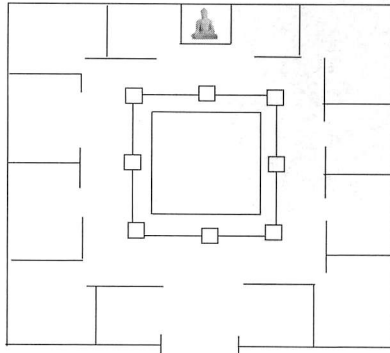
左から二番目の遺跡<sup>15</sup>からも金製の首飾りなどが見つかったため、ここも尼僧院ではなかったかと現地の住民たちは話しているが、まだ何とも断定できない状況にある。鬼子母神(Hariti)や解脱母(Hara)など密教の女神像、女性ナーガ(Nagakanya)などの美しいレリーフが入り口に見られる。他に富の神(Kubera)の立像や海の怪物Makaraのレリーフも見られる。もともとGarbhagrhaだったと思われる場所の門の両側に二人ずつ童女が手を合わせ、礼拝する形の

彫刻がとても美しく、玄関にあるナーガのレリーフの彫刻も興味深い。そこに立つ柱には蛇が片隅から入り込み、もう片方の隅から頭を出している光景が見られる。その蛇の頭上の右側の柱にターラー(Ṭārā)、左側の柱にハーリーティー(Harīti)と思われる立像が彫刻されている<sup>16</sup>。

中でも左から三番目の遺跡の彫刻が最も美しく状態も良く、三つの中では最も注目される。これらの遺品群は仏教彫刻を代表する作品であると言っても過言ではない。その内でも入口にある精密な彫刻の飾りは、今までに発掘された仏教精舎中の最高傑作である。その他、愛欲に溺れた男女の抱き合う姿が数多

く見られ、また仏教美術においては他に例を見ないと思われる象の交尾の彫刻なども発掘されている。さらにはパンチャタントラやジャータカの物語が描かれた美しい彫刻や女性立像や網をデザインして彫られた鳶の飾りやその横に配置されたナーガのカップルなど、非常に繊細なこれらの造りは仏教美術の一ジャンルを代表するものとして注目される。

二番目と三番目の僧院も階段の跡があるところから、少なくとも二階建てであったと推測される。



僧院・尼僧院の設計図

おわりに

五〜七世紀の間に建立されたと推測されるこれらの仏跡の殆どが二階建て以上の建造物であった可能性があること、それ以

外にも整った排水設備、企画された建築構造、流れるような非常に美しい彫刻が施されていることなど、それらはすべて当時の優れた建築技術を物語っている。特に、流線形をもつ像やレリーフはオリッサの彫刻を髣髴させる。

今回の発掘で発見されたシルブールの仏教遺跡は、大僧院ではなく、大勢の僧や尼僧たちが居住していたわけではない。その一つ一つが少人数を収容する独立した建物であったことが窺われ、当時の僧院・尼僧院が単立でも十分に生活できる経済力を持っていたことが考えられる。

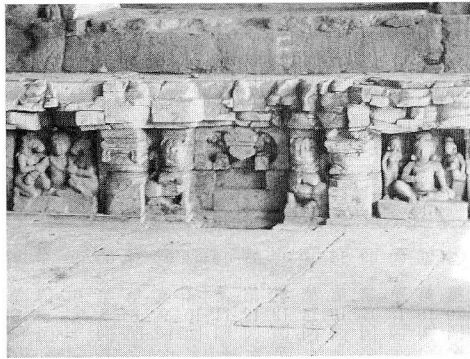
すべての遺跡のほぼ中心あたりにある矩形の場所は集会所 (Sabhāmandapa) と名付けられている。しかし、注意して見れば、そこには排水口が床より約三〇センチ余りも下にあり、その内側の壁に神像の美しい彫刻が施されている。その場所は本尊の前にあるため、それは単なる集会所と言うよりも護摩の焚かれた場所か、あるいは重要な儀式・儀式が行われていた場所であったと考える方がよいであろう。

バングルスや金製の首飾りの破片が出土したことから考古学者シャルマ博士はそれを尼僧院跡と推測している。しかし、土地の持主ナンデシユアル氏や他の仏教徒たちの考え方は同じではない。彼らは、出家者である比丘尼がバングルスなどの装飾品を身につけていたことには無理があると言う。ちなみに発見されているバングルスは漆製のものであり、そのことから判断すれば、それは既婚女性のものであったに違いはない。既婚女性のバングルスをもそのまま壊すことはヒンドゥー社会では





第19図 Sabhāmaṇḍapa 遺跡中心部



第20図 Sabhāmaṇḍapa の内側の彫像群

有り得ない。たとえ、未亡人になったとしても、その時には儀式に基づいてそれは壊される。しかし、既婚女性が比丘尼になる時にはそれを尼僧院に残して受戒などの儀式を受けるので、その時に彼女たちが身に着けていたものが取りはずされて、後に残されたものであると考えることは可能である。

わずか五〇メートルほどの距離の場所に他に二つの僧院と思われる遺跡がある。もし一番目が尼僧院であれば、他の二つも尼僧院であった可能性が高い。なぜならば、そのように極めて近い場所に僧院と尼僧院があったとすれば、比丘と比丘尼が極めて近くで生活していたことになり、そう考えることには無理

があるからである。

ともあれ僧院、尼僧院のいずれであったとしても、比丘・比丘尼がそこに居住していたと考える証拠は充分にあり、それが仏教の精舎であったことには疑問の余地はない。ここで興味深いことは、出家者が居住していたと考えられる場所に性的レリーフが見られることである。しかもまた人間の性的な彫像だけでなく動物の交尾のモチーフも見られる点が注目される。これを見た時、筆者にはヒンドゥー寺院のイメージが浮かんで来た。すなわち、世俗から離れるためにより一層世俗的なものを用いられるというイメージである。しかし、このような性的な

レリーフが施された門から中に一歩足を踏み入れるともはやそこにはそれらの痕跡すら見られない。これは、門の外側は執着に満たされた俗世間の、内側は執着から離れた出世間の象徴的な表現であると考えられる。

この遺跡の建造物の中には密教の特徴的な表現は少なく、むしろヒンドゥー教の影響が感じられるため、密教の初期段階のものと思われる。現在、日本の学界でも雑密経典が成立した時代は五、六世紀と考えられていて、この時代に密教の萌芽が見られると考えられている。いずれにしてもこれはヒンドゥー教の思想と

モチーフを取り入れ始めた時代の建物であり、その影響でこのような世俗的なモチーフが僧院にも取り込まれたものと考えられる。

しかし残念ながら、残存する殆どの仏像の顔の正面の部分がひどく削られている。これは異教徒による仏像破壊の結果と考えられる。

シルプールには二〇〇余りの塚が存在すると言われ、これらの遺跡のすべてが発掘されれば、ナーランダーより四―五倍の広さの仏教遺跡の全貌が現れるであろうと専門家は言う。これらシルプールの遺跡は現在、考古学者シャルマ博士によってユネスコ (UNESCO) の世界遺産に推薦されている。

この遺跡の発掘がすすめられ、古代インドの尼僧や女性信者の遺品が収集され、インド仏教全体に関する新たな情報が得られることを期待してやまない。

付記・本稿は、日本学術振興会研究奨励金および科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による成果の一部である。

## 註

① 第1図参照。

② インド考古学局・ライプール地区によって作成されたパンフレットの情報に基づいている。

③ 『大唐西域記』第十卷、大正五一、p. 929a.

④ 第2図参照。

⑤ 第3図を参照。

⑥ 第4図を参照。

⑦ 第5図を参照。

⑧ 第6図を参照。

⑨ India Travel Times, 1903年四月二十四日号。

⑩ 第7図参照。

⑪ 第8図を参照。

⑫ 第9図を参照。

⑬ 第10図を参照。

⑭ 第11図を参照。

⑮ 第12図を参照。

⑯ 第13図を参照。

⑰ 第14図と第15図を参照。

⑱ 第16図を参照。

⑲ 第17図を参照。

⑳ 第18図を参照。

㉑ 第19図を参照。

㉒ 第20図を参照。

㉓ The Economic Times, 1903年五月二一日号; The Telegraph, 1905年六月二一日号。